

# アンデスのアヴァンギャルド

——思想史的文脈から——

崎山政毅

## 1. 1920年代ラテンアメリカ・アヴァンギャルドにおける『ボレティン・ティティカカ』

ラテンアメリカの「歴史的アヴァンギャルド」(ベーター・ビュルガー)にとって、1920年代は一大画期をなしている。

メキシコ、ペルーをはじめ、アルゼンチン、ブラジル、チリ、キューバ、ニカラグア、プエルト・リコ、ウルグアイ、ベネズエラでも明瞭な動きが見られ、その他の中米・南米諸国でも少数派とはいえ種々の実験的な表現形式が模索された。こうした事実をふまえれば、1920年代はラテンアメリカ全域にわたるアヴァンギャルド運動の百花斉放の時期ととらえることができる。

概観すると、これらの運動に共通した特質として、以下の諸点を挙げることができる。

(1) ラテンアメリカそのものを自立的に規定し直すための、都市-農村関係がはらむ緊張関係への注視や「人種」や「国民」の概念の刷新・修正・転換をつうじた、新たなアイデンティティの模索と論争。

(2) 国民形成と都市化を主要な契機においた、近代性と土着性を同時に探究する、歴史の読み換え作業を基梃とする独自の総合性。

(3) 詩・評論・戯曲などのエクリチュールにおける試みが楽器演奏や朗読をつうじて音声的な領域と融合され、さらに壁画や版画あるいは写真・建築計画のような視覚表現との連結がはかられるといった多面にわたる協働。

(4) 同時代のさまざまな状況の推移と表現実践との間での、アクチュアルな応答関係

(5) 大西洋をはさんでの、あるいは南北アメリカを貫いての、雑誌の交換と作品の読解・批評・紹介をつうじた相互交流。

(6) 男性中心主義的な観点の前面化。

これらの特質を可能にした基盤は、それまでには存在しなかった歴史的かつ世界的な展開である。つまり、国民形成の要請を背景に近代化・都市化を主要な契機にした広義のモデルニスモの展開はもとより、1910年代のメキシコ革命、第一次世界大戦、1917年のロシア革命などの出来事の衝撃、第一次大戦後のヨーロッパでのシュルレアリスムや表現主義のような政治性を兼ね備えた新潮流の興隆、さらに西欧にとってかわってのアメリカ合衆国の台頭といった諸条件だといえよう。

いわば世界性・近代性を背景としたアクチュアルで大きな流れとして、1920年代のラテンアメリカにおける前衛主義表現運動は、それらに共通した文化的土壌のなかから登場し今なお強い影響を保っている。

その多様性や相互の関係において多頭のヒュドラのごとき様を示した1920年代ラテンアメリカ・アヴァンギャルドの動きのなかでも、きわだってユニークな存在感を呈したのが、この小論でとりあげる、ペルー・アンデス高地のティティカカ湖畔に位置する地方都市プーノの青年組織「グルポ・オルコパタ Grupo Orkopata」（「断崖集団」の意味）による月刊誌『ボレティン・ティティカカ *Boletín Titikaka*』（1926-30年）をつうじた表現活動である（図1 創刊号表紙）。

プーノは、1915年に元ペルー陸軍将校のメスティオン「ルミ＝マキ（Rumimaqui あるいは Rumi Maki）」（ケチュア語で「石の手」の意味）ことテオドミーロ・グティエレス＝クエバス Teodomiro Gutiérrez Cuevas（1872-1917年）に率いられた先住民農民の大反乱の舞台になった地であり、1920年代も多くの土地紛争・農民反乱が生じた土地である。それと同時に、アンデス高地にあってリマと肩を並べるほどの創作が盛んな文化都市でもあった。つまり、先住民民族を中心とする「農村」的な特質を色濃くとどめながら、文化活動をつうじて「都市」的なるもの・新しきものが追求された、両義性に満ちた場がプーノにほかならなかったのである。

こうした社会空間同志は、地域（とくに農村部）で出版されたアヴァンギャルド誌としては、ラテンアメリカのなかでもっとも長く継続したにとどまらず、ラテンアメリカ諸地域から欧米にいたる回覧・交換・批評の回路を形成した点で、ひときわ群を抜いた位置をしめている。

## 2. 南からの「アメリカ主義」

1900年のウルグアイの思想家ホセ・エンリケ・ロドー José Enrique Rodó（1871-1917年）の著書『アリエル *Ariel*』の出版は、アメリカ・スペイン戦争の余波にゆれるラテンアメリカにとって、決定的な衝撃をもたらすものだった。シェイクスピアの『テンペスト』に題材をとったこの本は、すでに去ってしまった「老いたる教師」＝プロスペローをヨーロッパに、物質至上主義にとりつかれ魂をうしなった「逸脱せる弟子」＝キヤリバンをアメリカ合衆国に、そして自らの高貴な魂の在り処をもとめる「師の教えの正統な継承者」＝アリエルをラテンアメリカになぞらえた。そして、近代へとつらなる歴史の過程における文化的＝人種的混交を所与の前提として、「ラテンアメリカ人」なる集団的＝国民的アイデンティティをもとめることをつよく訴えた。

『アリエル』は「アリエル主義者」と呼ばれる、ラテンアメリカ固有の魂＝アイデンティティを熱烈に追求する青年知識人を次々に生みだした。そして彼らのアイデンティティ探求の活動は、ヨーロッパに還元されることとも、アメリカ合衆国に追随することとも異なる、一種の「アメリカ主義」をさまざまな場所に登場させる。それはアヴァンギャルド運動においては、ヨーロッパのたんなる「派生物」としてではなく、自らの独自かつ固有な歴史的・社会的土壌を基礎とし



図1

た、西洋とは別の「近代」の希求でもあった。

その端的な一例は、メキシコのアホセ・バスコンセロス José Vasconcelos (1882-1959 年) による『宇宙的人種 La raza cósmica』における主張にみる事ができる。メキシコ革命における知的戦線の主要なイデオログのひとりであり、文化大臣として今に残る壁画運動のパトロンとなったバスコンセロスは次のように主張した。これまでの人種分類であった白人種・黒人種・黄色人種・赤色人種 (アメリカ先住民族) がそれぞれの起源地であるヨーロッパ・ヒューペルボレア・アジア・アトランティスとの絆を失ってしまった。それらの人種にとってかわって未来の可能性を有しているのは、混血によって生み出された唯一の美をそなえる「宇宙的人種」すなわちラテンアメリカ人種である (ちなみに彼の人種論のユニークさは、有色人種に対する人種主義を無根拠なものとして片づけている点に存している)。

イベロアメリカ大陸に棲息する混血人種の遠い未来、近い未来における潜在的可能性は…この混血人種を、地上はじめての総合的人種 *raza sintesis* たらしめていく運命…をもっている。

それはあらたな「国民」の形成というメキシコ革命後の実践が生みだした、南からの「アメリカ主義」であったといえる。バスコンセロスの主張は、しかし、黒人奴隷の未育の存在や、さまざまな地からの移民の存在をふくめて構成されている、ラテンアメリカ全域の多様性を事実上否定する。

なぜならば先述したように、現存する諸人種はその「起源」を喪失しており、究極の美にはかならない一元論的人種である「宇宙的人種」への過渡としての「混血」こそが重要だからである。そのため彼の主張は、射程をひろくラテンアメリカ全体にもとめる「アメリカ主義」でありながら、その現実的・実践的な適用は「混血性 *Mestizaje*」に限定されるという、はなはだ一貫性を欠いたものだった。バスコンセロスは自らの主張を「科学的思想」と呼んではばからなかったが、その根拠となったのが生物学的であると同時に文化的・社会的であるその「混血性」であった。

だが、そうした「混血性」の強調とは対極に、人口のうえて多数をしめる先住諸民族の「伝統文化」にもとづく「インドアメリカ主義 *indoamericanismo*」が、『ボレティン・ティティカカ』において主張されたのだった。

### 3. ガマリエル・チュラタと「インドアメリカ主義」

とくに『ボレティン』の「主筆」(正式なものではなかったが) をつとめたガマリエル・チュラタ (Gamaliel Churata 本名はアルトゥーロ・ペラルタ *Arturo Peralta* (1897 ~ 1969 年)、チュラタとは現地の先住民族アイマラの言葉で「啓かれた人」の意) の「インドアメリカ主義」の提起に、彼らのめざす方向ははっきりあらわれている。だがまずは『ボレティン』の活動を牽引したこの人物の横顔を見ておこう。

チュラタことアルトゥーロ・ペラルタは、母マリア・ミランダ・コルドバ、父デメトリオ・ペラルタ・ディアスの (非嫡出の) 第一子として生まれた。

父デメトリオは、プーノと並んで先住民農民運動が激しく展開された地域であるアレキパの出身で、プーノに出てきて靴屋をはじめ、成功をおさめたメスティーソである。デメトリオはまた、半封建地主の露骨な代理権力だったプーノ行政当局に対して、先住民の労働者や農民の権利擁護のために活動する社会運動家でもあった。

一方、母マリア・ミランダは、プーノ近郊の先住民村落に生まれ、土地をめぐる農民運動の活動をつうじてデメトリオと知りあった。彼らのあいだに生まれたチュラタは、生物学主義的な血統からいけばメスティーソということになる。だが、その容貌と母への愛着とがあいまって、幼少のときから自らを先住民族の（認知されず、また社会的な位置を異にする）一員としてとらえていた。

父の社会的な正義感と活動から薫陶を受けたこと、さらに、プーノ地域にカトリック教会が援助して設立した第881初等教育センター（小学校）で、ルソー、バスタロッチ、フローベールの思想、を実践しようとしていた理想主義者のホセ・アントニオ・エンシーナス校長という得難い教師にであったことが、彼の知的形成にとって決定的にはたらいた。

エンシーナスの指導下で、彼は明確かつ公然たる反抗精神と、後の著述家としての活動に必要なスペイン語・ケチュア語・アイマラ語という多言語におよぶ基本的なリテラシーを身につける。彼のクラスメイトは、彼が旧約・新約聖書、ギリシア・ローマ古典、その他、聖アウグスティヌスやトマス・アクィナス、ダンテ、フランシス・ベーコン、セルバンテスなどにふかく親しんでいたことを回想している。

彼が中等教育を受けたかどうかについては、残されている資料からも彼自身の言からもさだかではないが、印刷工見習として仕事をおこなったことは確実である。その間にチュラタは、印刷工のネットワークをつうじて、リマヤクスコなどにおける新たな政治的文化的な動き、とりわけインディヘニスモ（indigenismo 先住民族復権運動）が生み出したさまざまな雑誌を読む機会をえた。しかし彼はこれらの最新の動向に影響を受けつつも、政治的な主張をもって登場したインディヘニスモとは当初距離を保っていた。この時期、何よりも彼にとって大切だったのは、文学表現を介した世界の刷新だったからである。

1917年に彼は、弟アレハンドロ、さらに後に評論家として活躍するエミリオ・ロメーロ Emilio Romero (1899-1993年) とともに、最初の文学サークル「ボエミア・アンディーナ Bohemia Andina」(アンデスのボヘミア)を結成する。このときに自分のペンネームをガマリエル・チュラタとし、その後は本名をほとんど使わなかった。

このサークル活動の後、『ボレティン』の組織・刊行直前、チュラタは詩人の弟アレハンドロ Alejandro Peralta (1899-1973年) とともに、リマで刊行された一号かぎりのピラ詩集の連続体である「トランポリン・アンガール・ラスカシエロス・ティモネル trampolín-hangar-rascacielos-TIMONEL」(順にトランポリン→格納庫→摩天楼→操舵主の意味)に同人として名を連ね、首都のアヴァンギャルド詩人たちとのつながりをつくっている。

さて、チュラタは『ボレティン・ティティカカ』創刊号（この時点では『エディトリアル・ティティカカ・ボレティン *Editorial Titikaka Boletín*』）の主張欄で次のように述べている。

「インドアメリカ主義」とは、アメリカの精神的・知的・文学的な完全なる刷新を達成する

ためのプログラムを織り成す過程そのものをさしている。ヨーロッパでアヴァンギャルドが断罪した、文明社会における人間経験の断裂は、コロンブス以降の「新大陸征服」がきたした文化的破綻にほかならず、そのゆえにヨーロッパは第一次大戦をはじめとした凋落の一途をたどっている。… (中略) …

こうした事態にあつて、ヨーロッパのアヴァンギャルドを継承し変換した「われわれ」は自己の統一的特質の探究を根幹におく。そしてその探究は、アメリカの存在そのものにかかわるラディカルな問題解決の道筋をさしめず、歴史的・言語的・文化的な総合作用の究極目標にほかならない。

とくに、先住民族の文化が抵抗をつうじて維持してきた、アンデスの口承伝統と「世界に魂をあたえる」認識の歴史的で詩的な知恵とが、導きのおおもととなる。そのさい個々の生命の経験と集団的な生命の経験とをおのずと架橋する表現こそが「アメリカの表現」でなければならず、それは、世界を受け入れ認知する潜在的な可能性の掘り起こしを含む、アヴァンギャルドの探究によってはたされるだろう。

こうした姿勢に共感して「グルポ・オルコパタ」に参加したのは、ペラルタ兄弟と先に触れたエミリオ・ロメロ以外に、エミリオ・バスケス Emilio Vásquez (1904-1990年?)、唯一の先住民メンバーである戯曲作家イノセンシオ・マmani Inocencio Mamani (1909 - 1992年)であった (マmaniが住んでいた居住区が湖岸のバリオ・オルコパタだったことから集団名がつけられた可能性が高い)。

チュラタは、創刊から一貫して精力的な執筆活動を繰り広げた。その舌鋒はダダを想起させる実験詩集『トリルセ *Trilce*』ですでに国際的な名声を獲ていたペルー生れのアヴァンギャルド詩人セサル・バリエホ César Vallejo (1892-1938年 図2) にまずは向けられる。なぜならば、バリエホが亡命中のバリから送ってきた論争的な評論「専門家の秘密に抗して "Contra la secreta profesional"」(1927年)中の、「ラテンアメリカのアヴァンギャルドは20世紀ヨーロッパの表現運動の副産物・派生物にすぎない」とする規定がチュラタらのアヴァンギャルドとに真っ向から対立したからである。チュラタはバリエホを徹底してこき下ろしたのだが、その観点にみられる独自性・固有性の強調は「インドアメリカ主義」の提起に色濃くあらわれていよう。

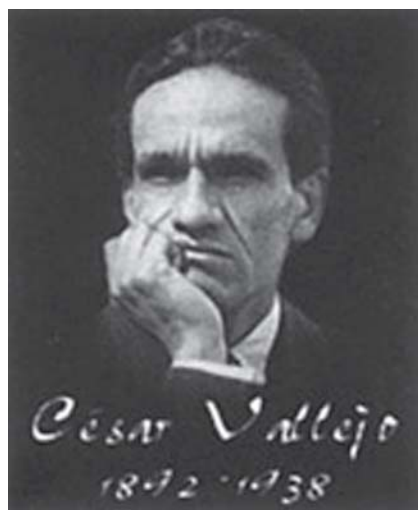


図2

バリエホを否定するチュラタの姿勢は彼特有のものではない。米国の「探検家」ハイラム・ビングラム3世 Hiram Bingham III (1875-1956年)によるマチュ・ピチュ遺跡の「発見」(1911年)を決定的な否定的契機として、当時のペルーを席卷していたのが、「植民地ルネッサンス」と現在呼ばれる動きである。「植民地ルネッサンス」は国際的なモダニズムに対抗しうるものとしてとくに建築・装飾美術史の分野でとりあげられたが、それはチュラタにあつては西欧モダニズ

ム＝バリエホの言説との切断を前面化する主張、すなわち「インドアメリカ主義」へと展開を  
とげたのである。

#### 4. 「ネオ＝インディアニスム」と「インディヘニスム」

上記の主張を展開しながらも、チュラタを軸とする『ボレティン・ティティカカ』は、その  
活動前期（1926～1928年）において、自分たちの探究の起点となる統一的な視座を確立してい  
たわけではなかった。それが明らかになるのは、先住民をめぐりいくつかの対立する主張が、  
『ボレティン・ティティカカ』に掲載されているという事実からである。

なかんずく、親米的な姿勢を示したクスコの知識人ホセ・ウリエル＝ガルシア José Uriel  
García (1891-1965年)がその著書『新たなインディオ *EL Nuevo Indio*』(図3, 1932年)にまと  
めることとなる「ネオ＝インディアニスム Neo  
Indianismo」や、有力な思想家であり政治家であった  
ビクトル・ラウル・アヤ＝デ＝ラ＝トーレ Victor Raúl  
Haya de la Torre (1895-1979年)の「改良主義的イン  
ディヘニスム」、さらにホセ・カルロス・マリアテギ  
José Carlos Mariátegui (図4, 1894-1930年)の「社会  
主義的インディヘニスム」が、それぞれの主張内容に  
かんする評価を抜きにしたまま並列的に掲載されたこ  
とは興味深い。

「ネオ＝インディアニスム」は、先住民を擁護しそ  
の復権を訴えるインディヘニスムにきびしい批判の矛  
先をむける。インディヘニスムにおける先住民は、歴  
史的進歩に背を向けた、「未開で貧しく泥にまみれた  
インディオ」の像でしかなく、今必要なのは新たな展  
開をつぎつぎと呼び込む歴史の流れに即し、日々ま  
ます近代人へと脱皮を遂げる「新しいインディオ」な  
のだ、とウリエル＝ガルシアは述べる。

それに対するインディヘニスムは、以下のような動  
きのなかから登場した。

1919年のクーデタで大統領の座を襲ったアウグスト・  
B・レギーア Augusto B. Leguía は「11年 La oncenia」  
と呼ばれるその独裁政権の下で、「上からのインディ  
ヘニスム」あるいは「官製インディヘニスム」を強力  
におしすすめた。そのため、レギーアは五点におよぶ  
インディヘニスムの政策をうちだした。

第一に先住民共同体の法的認知、第二に国家勸業省  
内の「先住民対策局」設置、第三に現地カトリック



図3



図4

教会のヒエラルヒーをそのまま活用した「先住民後援協会」の設置、第四に先住民共同体を準自治行政組織とみなして相互の連絡と協議をおこなう「先住民権利擁護委員会《タワンティンスーヨ》」の創設（タワンティンスーヨはケチュア語で四州帝国、つまりインカ帝国の意）、第五にペルーの自然資源を海外貿易（主に米国）の主産物たらしめ各地域間の連結をうみだすための「道路建設徴用法」の制定・施行。

しかし国家による強制労働の法制化にほかならなかった第五の政策がつよい反発を呼び、レギーアが「草の根」からの国家政策への動員の基盤とすることをもくろんだ「先住民権利擁護委員会《タワンティンスーヨ》」が鋭い国家批判の連合体に変化したことから明らかなように、「官製インディヘニスム」は頓挫をきたす。

ペルーを強靱な資本主義国家たらしめんとした、このレギーア独裁下の「インディヘニスム」に対して、「下からのインディヘニスム」を主張したのが、アヤ＝デ＝ラ＝トーレとマリアテギであった。

メキシコ革命直後にバスコンセロスの私設秘書をつとめた経験をもとに、ポピュリスト政党「アメリカ革命人民同盟 Alianza Popular Revolucionaria Americana」を創設者したアヤ＝デ＝ラ＝トーレは、メスティーソ中産階級を軸とした階級＝人種横断的な近代化政治によって先住民問題の解決が可能だとし、資本主義化の代替案を提起している。

彼の考えに述べられているのは、第一に国民生活への先住民の統合、第二に先住民共同体の維持と近代化のための立法措置、第三に先住民の小所有の奨励、第四にスペイン語・先住民言語の併用をはじめとした教育改革、第五にアルコールとコカ使用習慣の撲滅による善導政策である。

この指向性は（2010年度ノーベル文学賞受賞者のマリオ・バルガス＝リョサにもつうずる）統合主義的近代化論と考えてもよいが、先住民の能動的な主体性はほとんど無視されている。

それに対して、「ラテンアメリカ最初のマルクス主義者」と後に呼ばれるようになるマリアテギは、先住民問題の根幹は歴史的に形成された半封建的大地主制のもとの土地問題であり、先住民の共同体を主体とする社会主義的政治によってこそ、ペルーの変革は可能だと訴えた。

彼は「先住民問題の解決は社会的解決でなければならない」とし、「社会と文化との一有機的形態」として彼ら社会主義的インディヘニスム論者たちが先住民共同体に見出した「先住民共産主義」を軸とした共同体のよる社会主義への移行を考えたのである。

これら三つの政治的主張がたがいに相容れないファクターを抱えていることは明白だろう。チュラタらは、三者のあいだでのゆらぎから、一個の政治路線としての方向性を選び取っていくのである。

## 5. アンデスのアヴァンギャルドとその「終焉」

チュラタらは自ら設定した「インドアメリカ主義」に忠実に言語実験をこころみ、アンデスのこだまに模したタイポグラフィの使用をはじめとしたオノマトペへの着目や、ケチュア語の

独自表記の模索にもとづく表現の創造にとりくんだ。そのいずれもが、たしかに言語表現の実験としての独自性や文学性をもっている。だが『ボレティン・ティティカカ』に結集した彼ら若き「知識人」たちの思惑とは裏腹に、彼らの試みやよびかけは大衆に届き広がることはなかったのである。

その過程で、チュラタらが徐々に接近し自分たちの姿勢として選び取っていったのが、マリアテギの提起する「社会主義的インディヘニスモ」だった。チュラタの写真(図5)、や、彼にとってのインスピレーションの源泉であり、「天上の湖と地下の天空の小さなセイレーン」と呼んだ妻ブルニルダの死を悼む写真(図6)などは、そのファッションにおいても先住民族の様式を追求した彼の姿勢を端的に示していよう。



図5

興味深いのは、そうした土着主義的傾向と並行的に、アヴァンギャルド的あるいは革命的な活動をチュラタらが見せ付けていることである。彼らはプーノの町なかでは「夜のばか騒ぎ Pasacanas nocturnas」として批判的に呼ばれた「夜間セミナー」を開催し、トゥモロコシからつくった濁酒を鯨飲し、さまざまな「前衛作品」を高歌放吟している。アヴァンギャルドの反逆性の「正統」な表現といえるかもしれない。だがその一方で、集合写真(図7、前列左前で新聞を開いているのがアレハンドロ・ペラルタ、前列右端がチュラタ)に見られるような、ヨーロッパ的ともいえるスタイルを残している。とはいえ、この集合写真で見落としてはならないのが、チュラタの様子である。間違いようもなく彼は、「社会主義の世界的指導者」ウラジミール・イリイチ・レーニンを模している。

ここからも見て取れるように。チュラタらの「インドアメリカ主義」の文学的・美的ポジションは、マリアテギの社会主義的インディヘニスモへと政治的に転



図6



図7



身していったのである。

そのため彼らの活動は、文学を起点としながらも、年を追うごとにマリアテギが先住民族問題の根幹として指摘したアンデス高地での半封建的大地主制に対する批判となっていったのである。そしてその結果、『ボレティン・ティティカカ』は地主の尖兵となった軍および警察の露骨な介入を招き、その刊行は1930年8月をもって途絶させられた。そしてその1年半後、レギーアを軍事クーデタで倒して後を襲った独裁者サンチェス＝セロ Luis Miguel Sánchez Cerro (1889-1933年)の命令によって、彼らの会合の場所であったチュラタの家が軍によって強襲され、チュラタは隣国ボリビアへとその後30年以上におよぶ亡命の旅を余儀なくされたのである。

死のわずか前にチュラタは帰国を許され、彼の作品はペルーの国民文学の重要な一要素として公認されるにいたった(図8チュラタの帰国を報じる新聞記事、図9はチュラタの葬列)。だが、そうした位置づけには、『ボレティン・ティティカカ』がもちえた様々な地域とのつながりのもとでの表現・批評活動への、とくにアヴァンギャルド運動としてのそれへの適正な評価は十全に組み込まれているとはいえない。

マリアテギの言葉をかりれば「ペルーをペルー化する」ために彼らは「インドアメリカ主義」を主張し、「社会主義的インディヘニスマ」の政治に共振し、先住民族に彼らが見て取った土着的で「プリミティヴ」な表現の指向性を自らのものとした(図10 表紙に掲載された木版画のタイトルはケチュア語で「共同体(アイユ-

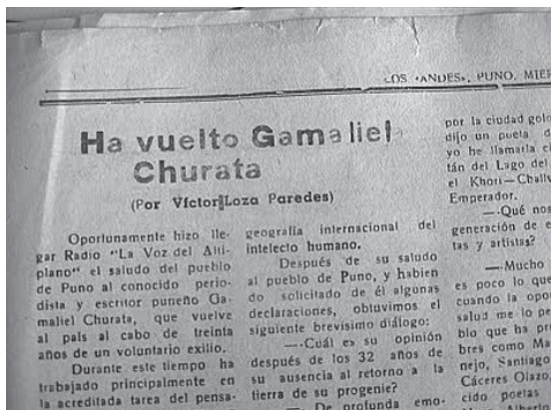


図8



図9

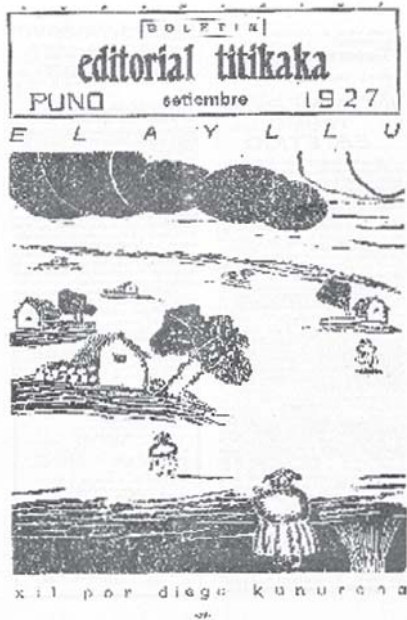


図10

El Ayllu」)。そして政治的抑圧のなかで集団的表現活動の継続を断ち切られたといえる。

いまだチュラタをはじめとした『ボレティン・ティティカカ』の表現活動とその広がりについては、ラテンアメリカのアヴァンギャルドが分析される際に必ず言及がなされながらも、十分な研究の蓄積が存在していない。この小論はようやくにして発掘・復元されてきた諸資料・史料に拠ったわずかな一歩である。

## 参考文献

- Boletín Titikaka* 2 tomos (edición faccimilar dirigida por Dante Callo Cuno), Arequipa, Perú, Universidad Nacional de San Agustín, 1994.
- Basadre, Jorge, *Historia de la República del Perú*, 6ta. edición, Tomo XIII, Lima, Editorial Universitaria, 1968.
- Bailey, Gauvin Alexander, *The Andean Hybrid Baroque*, Notre Dame, Ind. University of Notre Dame Press, 2010.
- Churata, Gamaliel, *Antología y valoración*, Lima, Perú, Ediciones Instituto Puneño de Cultura, 1971.
- Coronado, Jorge, *The Andes Imagined*, Pittsburgh, Pa., University of Pittsburgh Press, 2009.
- Flórez-Áybar, Jorge, *La novela puneña en el siglo XX*, La Paz, Bolivia, Sagitario, 1998.
- Haya de la Torre, Victor Raúl, *Por la Emancipación de América Latina*, Buenos Aires, Argentina, Gleizer, 1927.
- Huamán, Miguel Angel, *Fronteras de la escritura: Discurso y utopía en Churata*, Lima, Perú, Editorial Horizonte, 1994.
- Kapsoli, Wifredo, *Los movimientos campesinos en el Perú*, 3ra. edición, Lima, Perú, Ediciones Atusparia, 1987.
- López Lenci, Yazmín, *El laboratorio de la vanguardia literaria en el Perú*, Lima, Perú, Editorial Horizonte, 1999.
- Mariátegui, José Carlos, *7 ensayos de interpretación de la realidad peruana*, 55ta. Edición, Lima, Perú, Amauta,
- Pantigoso, Manuel, *El ultraorbicismo en el pensamiento de Gamaliel Churata*, Lima, Perú, Universidad Ricardo Palma, 1999.
- Tamayo Herrera, José, *Historia social e indigenismo en el altiplano*, Lima, Perú, Treintatrés, 1982.
- Unruh, Vichy, *Latin American Vanguardists*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1994.
- Uriel García, José, *El nuevo indio*, Cuzco, H. G. Rozas, 1930.
- Valcárcel, Luis E., *Memorias*, Lima, Perú, Instituto de Estudios Peruanos, 1981.
- Vasconcelos, José, *La raza cósmica,; misión de la raza iberoamericana: notas de viajes a la América del Sur*, Barcelona, España, Agencia Mundial de Librería, 1926.
- Vich, Cynthia, *Indigenismo de vanguardia en el Perú*, Lima, Perú, Pontificia Universidad Católica del Perú, 2000.
- Zavallos Aguilar, Ulises Juan, *Indigenismo y nación*, Lima, Perú, Instituto Francés de Estudios Andinos, 2002.
- 崎山政毅「アンデスのアヴァンギャルド」(社会思想史学会第31回大会報告集, 135-140頁, 2006年)
- 辻豊治『ペルー近代化過程におけるアブラの成立およびその展開』, 上智大学イベロアメリカ研究所, 1975年。